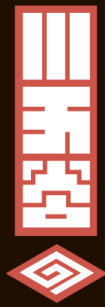


牛の角突き



おぢや牛の角突き ガイドブック



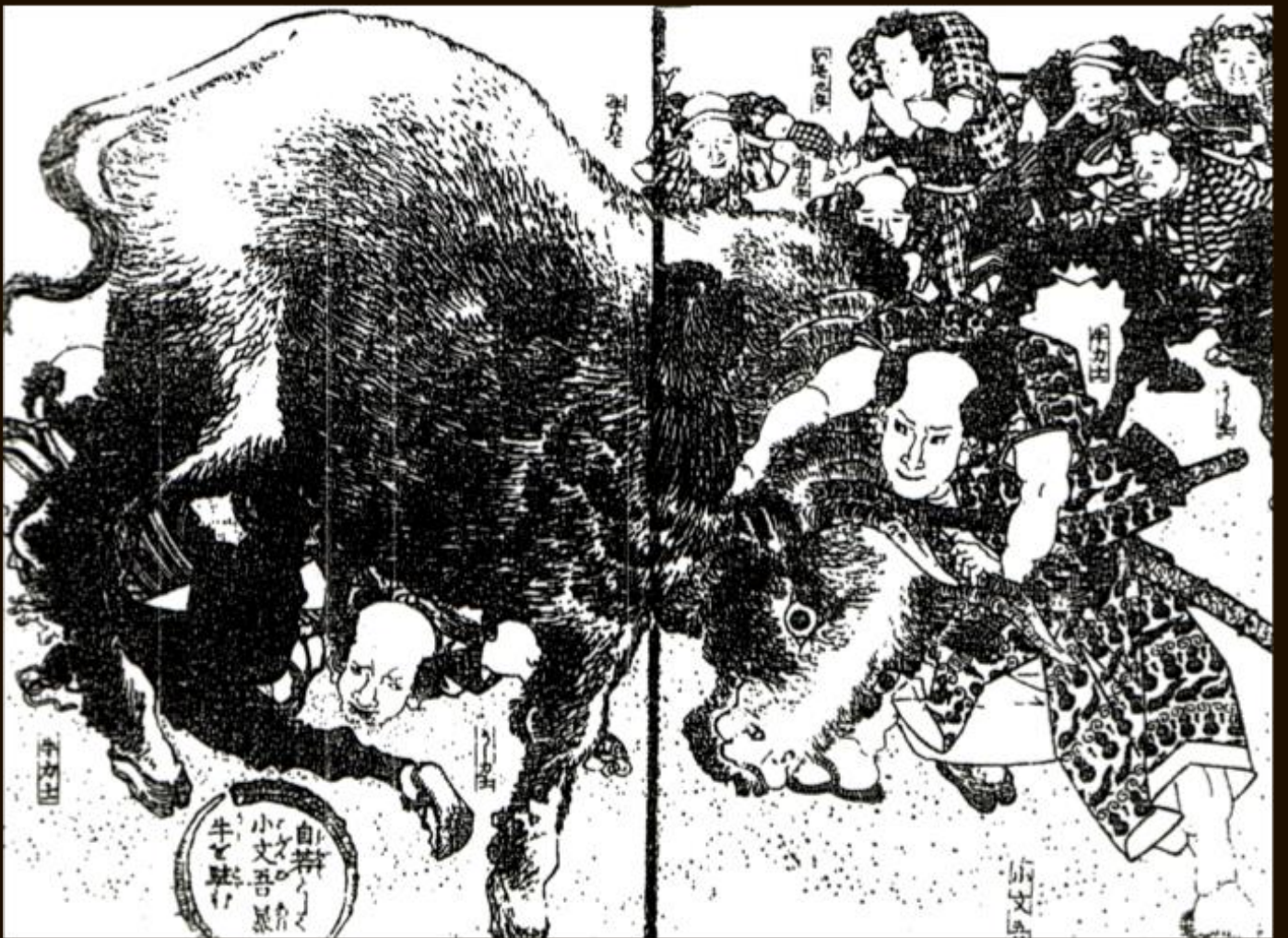
角突きの舞台

角突きの舞台となる小千谷闘牛場は小千谷市中心部から東へ約 10Km の東山地区と言われる山間部に位置しています。古くから東山地区と長岡市の山古志・太田・川口北部は二十村郷と称され、各村々で牛の角突きが開催されておりました。現在では、長岡市の山古志闘牛会と当小千谷闘牛振興協議会で 5 月～11 月まで開催しております。



習俗と歴史

当地の牛飼いは家族の様に牛を育て成長を喜び、角突きの技を楽しみます。角突きは戦いを引き分けるといふギャンブル性のない習俗です。これにより昭和53年に文化庁より「牛の角突き習俗」として国指定重要無形民俗文化財に指定されております。



滝沢馬琴の南総里見八犬伝より

小千谷の角突き牛

小千谷の多くの牛は、岩手県久慈市（旧山形村）で生産されている南部牛（日本短角種）の雄を導入して育てています。赤色、かす毛色や黒色などがあります。闘牛の体重は700～1100kgほどあります。出場資格は3才の牛からです。



岩手産南部牛との出会い



生産者の牛を真剣な眼差しで見
ていきます



導入する牛を岩手から運びます



角突き牛の導入を祝う厩（うまや）
入れを行う習慣があります

角突き牛の日常・牛との暮らし

普段、牛は牛舎で過ごします。牛は飼い主と共に散歩したり、ブラッシングして貰いながら、日々過ごしています。自宅で牛を飼っている家も多く、家族の様に牛を育てているのも特徴的です。自宅で牛を飼育出来ない牛持ちは共同牛舎で自分の牛を飼育して貰います。



干草を食べて育ちます



牛と共に散歩します



愛牛を綺麗に洗います

角突き開催

角突き当日は、朝から闘牛場に角突き牛がぞくぞくと集まってきます。同時に地域の人達が協力して、場内掃除や客席準備等、会場準備を行っています。



子供達も会場準備を手伝います



入場受付でお客様をお出迎え



角突きは神事であり、取り組み前に塩とお神酒で場内を清めます



会場準備と共に地元の子供達も集まってきます

出陣前と入場

出場前になると牛の周りに牛持ちを始め、鬮員（ひいき）にする仲間が集まってきます。牛は、お神酒で身を清められ、面綱と呼ばれる化粧回しを付け、堂々と入場していきます。



牛と勢子はお神酒で身を清めます



馬子(まご)にひかれて闘牛場に向かいます



「ヨシター」の掛け声と共に入場します



先に入場した方は相手を正面に据える様に待ちます

角突きの開始

対戦する両牛が入場したら、時計回りに大きく場内を回り、牛持ち同士が合図を出します。合図を確認したら、牛のハナギ（鼻綱）をほどいて、角突きが開始されます。



両牛が入場すると時計回りに場内を大きく回ります



勢子同士が合図を出すと、組み開始となります



勢子は牛の右側に立ち、ハナギ（鼻綱）を抜くのが習わしです



場外からハナギ（鼻綱）を抜いて走って入場する事を「山ヌギ」と言います

牛の技と個性

角を武器とし相手の顔や頭を突いたり、叩いたりします。先手必勝とばかりに攻撃を仕掛ける速攻型の牛も居れば、相手の攻撃を首などで柔らかく受け長期戦に持ち込み相手の疲れを待ち後半に反撃する持久戦型の牛もいます。



攻め込む牛と体を傾けて防御する牛



カケ 相手の角の下に自分の角をかけます



鼻を使う 鼻で相手の顔を上げて、一気に攻め込みます



ネリを踏む 戦い前にお互い威嚇します

※上記以外にも様々な技が有ります。

勢子の役割

勢子は闘牛場内で牛を闘わせ最も興奮状態の牛を引き分ける為、危険な役割を持っており、熟練した技術が求められます。



両手を広げ、「ヨシター」の掛け声で勢をかけます



牛にタイミングよく勢をかける勢子



勢子長が引き分けの判断をし、足掛け同士が合図を出して牛の足に綱をかけます



お互いに対戦相手の牛の鼻を掴み、引き離します

角突きを終えて

勢子が牛を引き分けたら、牛に再び鼻綱をつけ、面綱を掛けます。牛持ちは牛と共に場内を大きく回りながら退場していきます。



戦いを終えても、なお相手の牛をにらみつける牛



激しい戦いが無事終わった直後は、牛持ちも一安心



戦いの後は自分の牛を労います



場内を時計周りに大きく回り退場



取り組みを盛り上げる実況と解説



角突きは地元地域にとって月に1度の楽しみです

闘牛場周辺スポット



みまもり岩

中越地震後に誕生した闘牛場のシンボルです



共同牛舎

自宅で牛を飼育出来ない牛持ちの為に共同牛舎があります。東山小学校では共同牛舎で牛太郎を飼育しています。



木喰観音堂（県指定文化財）

江戸時代後期の遊行僧・木喰上人が約2年半にわたり彫り残したものです



金倉山（小千谷最高峰 581m）

滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」にも登場し、越後平野を一望できます

出店情報 ぜひお立ち寄り下さい



東山ミニ面綱会

東山伝統のミニ面綱・木牛を販売。縁起物です



かぐら南蛮くらぶ東山

かぐら南蛮の創作料理や軽食を販売



男子専科 平忠

闘牛Tシャツ・タオルなど闘牛グッズを販売



金倉そば道場

地元産のそば粉を使った手打ちそばをご賞味下さい



末広屋

東山の酒店。お酒やジュースを販売



サンプラザ 売店

小千谷のお土産販売所サンプラザの出張売店

牛の角突き大年表

西暦	和暦	出来事
1775頃	安永4	良寛が虫亀で角突きを見物し漢詩「虫亀看闘牛」を読む
1820	文政3	鈴木牧之が虫亀にて角突きを見物(3月)
1825	文政8	滝沢馬琴「南総里見八犬伝」
1852	嘉永5	江戸にて角突き興行(7月)
1888	明治21	東京浅草公園にて角突き興行(5月)
1893	明治26	新潟県知事が日清戦争時の戦闘意欲高揚のため角突き開催を臨時許可
1903	明治36	「新潟県令第9号闘牛取締規則」発布により角突き解禁(2月)
1936	昭和11	北越新報社主宰闘牛大会が小栗山にて開催(7月)
1945	昭和20	占領政策により闘牛禁止
1951	昭和26	山古志闘牛協会を再度結成(6月)、闘牛禁止の解除
1954	昭和29	東山村が小千谷市と合併(11月)
1967	昭和42	東山地区の牛頭数が40頭までに減少。塩谷を最後に角突き休止(5月)
1970	昭和45	宮本常一が山古志村に初めて来村し、角突きの復活などを指導(9月)
1973	昭和48	岩手県南部地方より2歳牛20頭移入
1974	昭和49	小千谷・山古志の牛持ちによる角突きトレーニング会開催(6月)
1975	昭和50	小栗山闘牛場にて山古志の牛20頭、東山の牛10頭を集め角突き復活(11月)
1976	昭和51	越後闘牛会発足(4月)。小千谷闘牛整備促進委員会を結成し小栗山闘牛場の整備開始(8月)
1977	昭和52	小栗山闘牛場整備完了(8月)
1978	昭和53	牛の角突き習俗保存会設立(2月)。小栗山闘牛場の管理移譲にあわせ、小千谷闘牛振興協議会設立(3月)。「牛の角突きの習俗」として国指定重要無形民俗文化財に指定(5月)
1997	平成9	牛頭数が復活直後の水準まで回復
2004	平成16	新潟県中越地震発生(10月)
2005	平成17	白山運動公園(小千谷市)と東山ファミリーランド(長岡市)にて代替開催(5月)
2006	平成18	小千谷小栗山闘牛場の復帰初戦(6月)
2008	平成20	小千谷闘牛振興協議会が「地域づくり全国交流会議」の地域づくり表彰にて会長賞と審査員特別賞を受賞(11月)
2010	平成22	小千谷闘牛振興協議会が共同牛舎開設(8月)
2013	平成25	越後闘牛会再発足(3月)

小千谷闘牛場へのアクセス

小千谷闘牛場まで関越自動車道小千谷 IC 下車 20 分です。



1. 関越自動車道小千谷 IC を降りたら右折し、小千谷駅方面に向かいます。
2. 小千谷駅に突き当たったら、左折します。
3. 横渡（よこわたし）を右折します。



4. トンネルを抜いたら左折します。

発行：小千谷闘牛振興協議会・小千谷闘牛北斗会
最新情報はホームページよりご確認ください。

<http://www.tsunotsuki.com>